令和元年度　姉妹校等留学プログラム

●学校・団体名/研修名（派遣高校生数）

横浜市立桜丘高等学校/ドイツ国際交流プログラム（２名）

●渡航先

国/都市：ドイツ/フランクフルト市

外国の高校：シューレ・アム・リード

●渡航期間

2020 年２月 15 日～2020年２月 23 日

Ｙ・Ｉさん

１　プログラムにおける事前学習・準備とは

私が今回の派遣留学プログラムに参加したいと思った目的は、自分に自信をつけ、将来の夢を見つけたいと思ったからです。英語表現の授業などを通じて何事も準備、練習が第一であると実感していました。なので、準備の大切さを十分理解し、積極的に取り組むことができました。

私たちは約８ヶ月間、準備を進めてきました。ソーラン節の練習では、はじめはなかなか振りが覚えられず、練習に対する意識が低かったと思います。ですが本番を １ ヶ月後に控えた頃から実際の法被を着たり本番に対する意識が高まり、踊りの意味を考えて練習できました。練習を重ねるうちにみんなの動きや声、思いが揃っていくのを感じました。準備を通じて仲間たちとより仲を深めることができたと思います。

ワークショップでの私のグループのテーマは地球温暖化についてでした。地球温暖化に対する問題はとても幅広く、自分自身の生活に落とし込んで考えようとすると、もっと先の世代の問題のように思え、現実味がないと感じました。そのため、思うように準備が進まないことがありました。準備を進める中でヨーロッパでは F.F.F.という環境問題に対するデモへ参加している学生が多いことを知り、私たち日本人は世界の環境問題について無関心、無知であると感じました。ワークショップのグループにいた子の中にも参加したことがある子がいて、実際に参加した人の話を聞くことが出来ました。自分たちの英語力は高くないので伝えたいことをうまく伝えられるように情報を集め、グループで共有し、何度も練習を重ねました。そこで意識したことは、グループ内で助け合い、補えるようないい雰囲気づくりを心がけることと、自分にしか語れないことを語ることです。意見が出ず話し合いが停滞することがありましたが、先生にヒントをいただき、自分たちでひとつひとつ答えを出していったことでそれが最終的な自信へと繋がりました。

2. ドイツを肌で感じて

ワークショップ、ご飯作り、日本紹介ではホストファミリー以外の人と同じグループになれたことで色んな人と話す機会ができ、たくさんの友達ができました。多くの人と関わる中で、ドイツの人は大人っぽく、自国の政治や環境問題に対しても自分の考えをしっかり持っていてそれを発信できる子が多いなと思いました。体験した授業はほとんど話し合いや意見の交換で行われていてひとりひとりの活動がとても活発でした。積極的に授業に参加し、自分の存在感を示すことが求められるのだと思います。自分も芯のある、優しい人間になりたいと思いました。

3. 成果と課題

このプログラムを通して、言葉だけでなく一生懸命態度で示そうとすることが一番伝わることを学びました。異文化交流で大切なことは自分の国のことを知っていること、相手を理解しようとすることだと思います。相手が自分の国や自分のことに対して興味を示して理解しようと質問してくれたときに答えられることは、こちらが相手を理解しようと会話を広げるためにも必要だと思います。日本語のひらがなやカタガナ、漢字の仕組みについて聞かれたときにうまく答えられず、一緒にインターネットで調べたことがありましたが、私自身日本人として自分の言葉で教えることができず悔しかったです。会話をスムーズにわかりやすくするためにもまずは自分が理解する必要があると思いました。

時間が経つと楽しいことも悩んだことも忘れがちですが、ひとつひとつ自分の成長のために必要なことなので、感じたことを言葉にして書き留めることが大切だと思いました。何かに残すことで振り返った時に自分の言葉で思い出すことができます。また書き留めたものは自分で作り上げたものとして自分の自信にも繋がることを学びました。

私自身の課題として感じたことは、自分自身の英語力の低さです。家族がドイツ語で話していたら、家族のうちの誰かが英語で翻訳して内容を話してくれたので言葉の壁をあまり感じませんでしたが、話している中でやはり単語が出て来ず、辞書を使ってコミュニケーションをとりました。その度にもっと英語が話せたら自分の言いたいことを伝えられるのに、と歯痒さを感じていました。なので、自由に海外の人とコミュニケーションが取れるようになりたいと思い、英語の学習への意欲がより強くなりました。

今回の経験は改めて将来は英語を使って海外の人と関わるような仕事をしたいと強く思い、将来の自分を想像させてくれる機会となりました。もっと広い視野で考えることの大切さを知り、自分自身のことを見直すことができました。関わってくださった沢山の方に感謝したいです。

Ｙ・Ｓさん

1　プログラムにおける事前学習・準備とは

私が事前学習で最も考えた事はチームワークについてだ。初めの頃、事前学習と言われて考えていたのはそれぞれが課題について調べ、まとめる事や、授業のようにドイツ語を学ぶこと。ワークショップでは自分が言いたいことをレポートにし、プレゼンをするようなものだと考えていた。つまり、自分自身ができていて、それが形なっていればいいと考えていたのだ。

初めての調べ学習の時のプレゼンはテーマを分割し、全く違うものをそれぞれが調べてくるという方法で行った。結果として各個人の繋がりが無く全体にまとまりがなくなってしまった。さらに、お互いが調べたことを把握していないため質疑応答の際、担当していない質問に無関心になっていたように思う。当時はまだ上手くいかない原因を理解出来ず、質問に答えられないのは担当する人の準備が足らなかったからだと考えていた。そしてワークショップの時もそれまで通り役割分担をし、各々が調べたことを共有する計画だった。しかし、準備や話し合いをすすめ共有していく際に専門的な知識が必要だったり、各問を見つけたりしたことによって、個人で調べるより全員で共有したらより深く学べることに気がついた。そのため、単に役割分担をするのではなく、皆でテーマ全般を調べてくるように変更した。それは、それぞれの問題は独立しているのではなく互いに繋がっていると分かったからだ。すると、班で調べた事が全員の知識になり、今まで情報の共有だったのがそれについての「個人の考え」という点での話し合いができるようになった。さらに、実際のワークショップの時にはお互いの言いたいことを把握出来ていたため、言いつまった時に助け合い会話の流れが止まらず、ひとつのテーマを脱線しすぎず、続けることができた。

もし、この事前学習をしなかったら私は役割分担によって自分に与えられた仕事を、他の人の持っている知識や、課題、問題に対して考え方を理解せずに自分一人の価値観でまとめ、納得してしまっていたと思う。今回、時間をかけて仲間と同じテーマに取り組むと、自分では考えつかなかったものにたどり着けることが分かった。この先、考え方、意見の違いという点をしっかりと意識しながら他の人の意見を踏まえて自分の考える問題を解決できるようにこの経験を活かしていきたい。さらに、対話の時にも自分の意見を相手も同じように考えていると思い込まず、相手の考えを踏まえてしっかりと話し合いながら進めていけるようになりたいと思う。

2. 本 当 の 異 文 化 交 流

私は、このプログラムの目的として異文化交流というものを一番に考えていて これについて今回とても多くのことを学べたように思う。

一番印象に残っているのは初日の夜のことだ。その日、早速日本からのお土産をホストファミリーに渡す機会があった。そこで私はかりんとうや抹茶味のお菓子。桜の描かれたキャンディなどを持っていった。さらに、お餅や、食品サンプルといった外国人が日本のものとしてイメージしていると思っていたものもいくつか持っていった。それらを渡した時、お餅を見て「見たことがない」と言われてしまい知っていると思っていたばかりに

調理方法を上手く説明することができなかった。聞くと、日本の文化はよく知らないと言われた。私は、このプログラムに参加しているのだから日本の文化は有名なものなら理解してもらっていると考えていた。同じように、「ドイツ料理で知っているものはあるか」と聞かれた時、二つほどしか挙げられなかったし、ドイツで有名なチョコレートだと見せられたものは私には見たことも聞いたことも無いものだったこの時に、お互いに自国の文化で無意識に知っていたものは相手も知っていて当然だと思っていたんじゃないかと感じた。さらに、驚いたことは、バームクーヘンはドイツのものだと知っていたので食べたいと言った時、クリスマスにしか売っていないし、ドイツ人はあまり食べないと言われた事だ。日本では一年中売られているため、ドイツでもそうだと思っていたが、本場とは違う形になって伝わっているものがあることを改めて感じられた。私が思う「有名なもの」が一般的に知られていると思うのは間違いだったと気付かされた私は、日本の文化が世界中で取り上げられている番組が放送されているのを見て漠然と日本の文化はとても有名なものなのだと錯覚してしまっていたように思う。実際に体験すると、日本の文化を知っている人は限られた人のみで他の人はアニメなどもあまり知らない様子だった。

今までは日本から見た情報のみで国際的な物事を判断していたから、日本に偏ったものの見方を無意識にしていたのだとこの時気づくことが出来たので、その問題が自分もしくは自国にとってどのようなものかを知るだけでなく、相手方にとってどのような問題なのか、両方を知ることで初めて偏りのない公平なものの見方ができるのではないかと思った。これからは自分から見たものの他に、第三者の視点から物事を見る力を身につけていきたい。

3. 成果と課題

私はこのプログラムを通して自分事として捉えることの大切さと大変さを感じることができた。自分が如何に偏った考え方をしていたのかをしていたのかをはっきりとさせ、無意識に流していた課題を見つめ直すことが出来るようになったに思う。

このことはワークショップの時に強く感じることが出来た。今回のワークショップは環境問題についてだった。事前学習の時に自分ができる限りの準備をしたのでとても充実したディスカッションが できるのではないかと考えていた。しかし、実際はとても悔しさが残ったものとなった。なぜならドイツの人達は私たちが何ヶ月もかけて準備したものをたった１０分程でまとめてしまったからだ。つまり、ドイツでは日頃から環境問題に対する考えを持っているということがわかる。正直に話すと、私はこのような機会がなければここまで熱心に環境問題に対して調べることはなかっただろう。どこか他人事に捉えて、自分ができることはせいぜい節電ぐらいだと責任逃れしていたに違いない。それに対してドイツでは自分事として捉えるということが当たり前にできているのだと思った。それを見て自分の意見がまとめられたことぐらいで納得してしまっていた自分は今まで楽観視しすぎていたのだと気づくと同時に、環境問題やテレビで放送されるような大きな問題を自分事としてとらえることが重要だと感じた。

自分事として捉えることが出来れば問題に対して危機感と責任感がうまれ、解決する

ために努力できるようになるし、自分という個人として考えることは相手に対しても個人として向き合うことが出来るため、先入観なくお互いを尊重し合えるようになるのではないかと思う。今ではグローバル化が進み、個人が自由に国を行き来できるため、この自分事として捉えるというのはとても重要になってくるのではないかと考える。これらの事は言葉で言うこと、人伝に聞くことはとても簡単で、表面上は納得していたつもりだった。しかし、実際に体験してその意味をより深く意識し、無意識に流していたものを再確認することができた。それによって環境が変わることで自分はできないことがとても多いのだという自分自身の未熟さと向き合い、仲間にどれだけ助けられていたのかを知り、物事の新しい考え方、とらえかたを学ぶことが出 来たと思う。この経験を思い出にしてしまわないように、日々の日常に取り入れてより自分を成長させていきたいと思う。